

# 図書館だより

Library News No.70

Nara National College of Technology

2013年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



表紙画像は、1E 伊庭由季乃さん（左上）、1E 土橋果歩さん（左下）、1C 鈴木遼太郎君（右下）の作品  
右上は、秋の読書週間の展示を終えた学生図書委員の皆さん：今年のテーマは「天体に関する本」

## 目次

巻頭言 「図書館と読書の思い出」.....	2
多読表彰について.....	3
読書感想文コンクールを終えて.....	4
読書感想文入賞作品.....	6
本を読みましよう！～図書館から～.....	12
電子ジャーナルを使ってみよう.....	13
学生図書委員会活動報告ほか.....	14
information .....	16

## 図書館と読書の思い出

情報工学科主任 浅井 文男

図書館という言葉を知ると真っ先に思い出すのは学生時代を過ごした大学の付属図書館である。私が大学の教養部に在籍していた当時、すでに学園紛争は下火になっていたが、それでも全学ストライキは年中行事として存続していた。「全学スト決行中」の立て看板で校舎から閉め出された学生の行動は3つに分かれた。一つは下校する、一つはサークルのボックス(部室)に行く、そしてもう一つは図書館に行く、である。私は入学当初に加入した文系サークルのボックスに入り浸った。そこでは文学部や法学部など、私には縁遠い学問を専攻する先輩たちが文芸談義に興じる傍ら、「Das Heft」と銘打った日記帳に辛口の批評を綴っていた。ケータイもインターネットもなかった時代、「Das Heft」はコミュニケーションツールの役割も果たしていた。遠慮がちにつぶやくことから始めた私も、いつしか書き込み談義で盛り上がった書物を図書館で探し出しては読むようになった。四畳半一間の下宿とは別世界のような快適な閲覧室と豊富な蔵書、それに有り余る自習時間に恵まれて、「Das Heft」に触発された書物に親しむことが私の日課となった。その頃読んだ書物から推薦図書として一冊を挙げるとすれば、英雄叙事詩「ニーベルンゲンの歌」を除いて他にはあるまい。昨今流行の電子書籍版もあるらしいが、ドイツ古典文学の最高傑作を堪能するには、やはり相良守峯訳の定番文庫本がお薦めである。

教養部から専門課程に進むと図書館で親しむ書物は専攻する専門分野の教科書や論文誌に変わった。全学ストの影響で専門課程に進むのが半年遅れたこともあり、目一杯の背伸びをしては名著の誉れが高い教科書を選んで読破に挑むのが日課となった。こうした書物は運がよいと通学路周辺に散在する古本屋で手に入れることもできたが、図書館がなければ私の血気にはやった企ては見果てぬ夢に終わったであろう。朝永振一郎の「量子力学」しかり、ディラックの「量子力学」しかり、である。どちらもタイトルは同じ「量子力学」であるが、まったく異質の教科書であった。前者は大河ドラマ仕立ての豪華絢爛な歴史絵巻を手汗握る臨場感で読み耽る経験をさせてくれた。後者は遙か彼方の地平線まで一直線に伸びるハイウェイをスポーツカーで疾走する心地よさを体験させてくれた。

あれから40年余り、「ニーベルンゲンの歌」や「量子力学」のような分厚い書物はめっきり読まなくなりました。休日には近くの図書館に足を運び、閲覧室で軽い読書を楽しんでいるが、学生時代に味わった目眩く読書とまるで違うことは言うまでもない。学生の皆さん、心に残る書物はありますか？ なければ今だけです、図書館で出会えるのは。

# 多読表彰について

## [ クラス多読表彰 ]

クラス多読表彰は、図書館の統計に基づき、一人当たりの貸し出し冊数の多いクラスを表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰されたクラスには副賞として、希望図書の購入ができる権利を贈りました。



- 第1位 機械工学科4年 (38.3冊/人)
- 第2位 電子制御工学科4年 (25.5冊/人)
- 第3位 物質化学工学科3年 (23.4冊/人)
- 第4位 電気工学科4年 (22.4冊/人)
- 第5位 機械工学科5年 (20.2冊/人)

## [ 個人多読表彰 ]

個人多読表彰は、図書館の統計に基づき、貸し出し冊数が多い学生個人を表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰された学生には副賞として、図書カードを贈りました。

- |               |        |                |        |
|---------------|--------|----------------|--------|
| 第1位 機械工学科4年   | 澤井久実さん | 第6位 物質化学工学科3年  | 中谷美智さん |
| 第2位 情報工学科5年   | 岸本 光さん | 第7位 電子制御工学科1年  | 他谷 周さん |
| 第2位 機械工学科3年   | 北園一将さん | 第8位 電子制御工学科4年  | 内川翔太さん |
| 第4位 電子制御工学科1年 | 金井達哉さん | 第9位 電気工学科4年    | 東井孝途さん |
| 第5位 情報工学科4年   | 山門 彩さん | 第10位 電子制御工学科4年 | 海本祐真さん |

表彰式は1月7日(月)昼休みに校長室にて行われました(5ページの写真をご覧ください)。

## 図書購入リクエスト、随時受付中!

図書館カウンターにある用紙に記入し、提出して下さい。図書館ホームページからもリクエストを送ることができます。(HOME > 資料検索 > 推薦(希望)図書)

読みたい本、図書館に置いてほしい本があれば、是非リクエストをしてみてください。

ただし、無条件に購入できるわけではないので注意してください。

例：ライトノベルの4巻以降、楽譜、漫画等は不可等



平成 24 年度

## 読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

第 37 回校内読書感想文コンクールの審査結果を發表します。学生の皆さんから、1 年生 195 編、2 年生 194 編、3 年生 16 編と合計 405 編の応募がありました。昨年度に引き続き応募総数が 400 編を超えたことを喜ばしく思います。情報メディア教育センター運営委員会の教員 9 名と国語科教員 2 名による審査・投票の結果、その中から次のように 7 名の入選作を決定しました。すでに 1 月 7 日の全校集会放送でもお知らせしましたが、以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、榮譽を称えたいと思います。

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った作品は佳作とし、その学生の氏名も併せてここに紹介します。

今年度は飛び抜けて評価の高い作品はなく、選考には苦慮しました。僅差で佳作となった作品も多くあったことを申し添え、来年度の応募に期待します。

### 最優秀賞

該当なし

### 優秀賞

機械工学科 1 年	大前 雄也	支配された世の中
機械工学科 1 年	松内 秀直	大人に近づく子供 - 『エイジ』を読んで -
情報工学科 1 年	辻 悠一郎	僕の数学への考え方 - 『なぜ分数の割り算はひっくり返すのか?』を読んで -
物質化学工学科 1 年	山本 峻也	ハイジと走に学んだこと - 『風が強く吹いている』を読んで -
機械工学科 2 年	鈴木 耕太	『物理屋になりたかったんだよ』
物質化学工学科 2 年	小柳 伊代	本物のエンタテインメント
物質化学工学科 2 年	隅谷 大良	正義の味方と殺人犯 - 『罪と罰』を読んで -

### 佳作

1 M 上田 誠也	1 E 伊庭 由季乃	1 E 土橋 果歩	1 E 豊永 喜健
1 S 酒井 垂規行	1 S 前川 哲志	1 熊本 祐馬	1 C 岡本 悠介
2 M 潮田 昂士	2 M 森 一太	2 E 板坂 将希	2 E 大西 将樹
2 E 北村 拓海	2 S 中谷 裕美	2 I 久保 基	2 I 長江 優花
2 西岡 祐希	2 C 川原 歩夏	2 C 黒崎 澪	2 C 澤田 廉
3 M 早瀬 康洋	3 東口 充希		

以下にそれぞれの入選作品について、簡単に講評しておきます。

1 M 大前さんの作品は、コンピューターが人間を支配することの恐ろしさから、人間とコンピューターのつきあい方について述べたものです。星新一の短編（「ショートショート」と呼ばれています）を題材に、受け身ではなく積極的な姿勢を持つことで、コンピューターやメディアと人間がよい関係を築く可能性について考えています。

ちなみに、星新一のショートショートは、原稿用紙 10 枚（文庫本なら 6 ページほど）の短い分量で、人間社会をうまく描き出しています。科学の発達と人間との関係を題材とした作品も多く、個人的には「おーい でてこい」（『ポッコちゃん』所収）などをお勧めします。

1 M 松内さんの作品。「ペダルを強く踏み込んだ。プチプチプチプチッと、チューブがちぎれていく。ぼくはどんどん身軽になる。」この引用が効いています。主人公の栄司は中学二年生。おそらく感情移入しやすい本だったと思います。松内さんのこの本に夢中になった気持ちがよく表れた文章です。欲を言えば、もう少し本の内容を入れたほうがよりわかりやすかったのではないかと思います。

「読書感想文なんてどう書いていいのかわからない」という人もいますが、まず、本の内容をある程度

紹介してもらう必要があります。それをふまえ、自分の体験、身の回りの出来事と関連づけて、考えたことを自分の言葉で述べるようにしてください。あらずじばかりでは困りますし、かといって、どのような本かわからないのも、感想文という、ある意味本から独立した「作品」としてはもの足りないものとなります。

さて、高専には、中学生の時、数学が得意だった学生も多くいることでしょう。しかし、高専に入学してから、数学を難しく感じる、中にはあまり好きでなくなった人もいないでしょうか（高校でも同じですが）。

1 I 辻さんの作品は、そういう人にぜひ読んでほしいものです。「数学＝理系ではない。」この書き出しが効果的です。日常生活でも数学的な発想・ものの見方が重要であることを上手にまとめています。惜しむらくは、辻さんも文字数が若干少なかったことです。せっかくよいテーマを取り上げていますので、もう少し考えを深めてもらえればと思いました。

1 C 山本さんは、本校の学生にも人気のある『風が強く吹いている』をうまくまとめています。毎年正月に行われている「箱根駅伝」を題材とした三浦しをんの本ですが、感想文の書き出しを印象的な部分の引用からはじめ、自分の考えたことが二つある、と要約し、それぞれについて、本の内容を紹介しながら述べています。高専の5年間はどうしてもどこかで中だるみの時期があります。山本さんの言うように、悩んだり落ち込んだりしたときに、本によって励まされることがあります。

2 M 鈴木さんは、ノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊の本を取り上げました。最後のほうで「研究者には人付き合いの能力が必要であることを知った」と書かれているように、小柴さんの研究と人とのつながりを紹介しながら、自分の考えをまとめています。皆さんにもぜひ読んでほしい一冊です。

2 C 小柳さんの作品は、タイトルが工夫されています。人気グループ EXILE について書かれた本を読んで、自分の吹奏楽の体験に引きつけ、「エンタテインメント」とは何か、よく考えています。以前は漫才師の本なども学生に人気がありましたが、どの分野であれ、きちんと仕事をしている人は自分なりの流儀を持っています。音楽もまた、人を励ます素晴らしい力を持っています。

2 C 隅谷さんは、ドストエフスキーの名作に挑戦しました。読破したというだけでも感心しますが、たとえば「戦争」という状況では、「殺人」が正義となるのか、また殺す「権利」はあるのかといった難しい問題についてよく考えています。「殺人」は、身近なものではないと思いますが、誰かにちょっと「復讐」したい、という考えが頭をよぎることはあることでしょう。その時に皆さんにも考えてみてほしい問題です。

今年度も、初参加の1年生の健闘が目立ちました。今年の1年生はよく本を読んでいるという印象がありましたが、その成果の現れでしょう。また、2年生以上の学生も、読書の習慣がついている学生が多くいることと思います。これからも大いに本に親しんでください。そしてできれば、自分の読んだ本について簡単な記録（書名と著者名だけでもよい）をとってみてください。パソコンや携帯電話に入れておいてもよいでしょう。あとで見返したときに、自分の財産として感慨深いものがあるはずです。

最後に、多数の応募作が寄せられたことに感謝するとともに、次回も引き続き学生の積極的な取り組みに期待します。

(国語科：鍵本)



読書感想文入選者と多読表彰された皆さん（クラス多読は代表者）

# 読書感想文入賞作品

『夜のかくれんぼ』より「勝負」 星新一 著

## 支配された世の中

1 M 大前 雄也

星新一氏の『夜のかくれんぼ』に収録されている、「勝負」というストーリーを読んだ。エフ博士という人物が、機械に支配された世の中を変えるため、コンピューターが徐々に異常になる伝染病菌を開発する。しかし、裏の世界では人間がコンピューターの指示に忠実に従うようになる薬が開発され、食品などに混ぜられる。この二つが同時に出回り、人々は異常なコンピューターの指示に従ってしまう。エフ博士までも。というストーリー。

このストーリーは、実に今の世の中を風刺していると思う。現に今、自分自身は様々なものに縛られて生きている。コンピューターは分かりやすい例だ。自分の生活を見返してほしい。多かれ少なかれコンピューターや、携帯電話といった端末などに依存しているはずだ。毎朝テレビから流れるニュースをそのまま鵜呑みにして納得するのだから、みんなそうだ。そんなことはないと思う人はすでに薬が効いてしまっているのだろう。

しかしながら、機械やコンピューター、メディア端末などといったものを利用するのは、悪いことではない。生活の助けとなり、なにより便利なのだから、むしろ良いことだ。もし今、身の回りの機械がすべて止まり、コンピューターやメディア端末がなくなれば、我々は何もできないはずだ。問題はそれをどう使いこなすかといったところにある。

今の世の中は、「コンピューターが人間を支配する」ようになってしまっている。なぜそれがいけないのかというと、機械の存在が一番上になれば、それを管理する者がいなくなるということ。それはとても恐ろしいことだと思う。感情のないものが支配する世の中など……。

たくさんのメディアに彩られたこの世の中。メディアに支配されるなというのは難しいかもしれない。しかし、すべてをコンピューターに任せた人生

などおもしろくない。人とふれあうことの楽しさや喜びを知った上で、コンピューターなどのメディアを利用することができれば、もっともっとそれらの可能性も広がると思う。人としての感情をもってメディアを利用するのと、無感情のままメディアに利用されるのでは大きく異なる。メディアに限らず、例えば勉強も同じようなことがいえる。何の感情もなくただやらされる「受動的」な勉強は、どうしても楽しくない。逆に、何かに興味を持ち、深めようとする「自発的」な勉強は、自然と楽しいといった経験がある。スポーツでもそう。実際にプレーしてみ、楽しさを知ることができれば、スポーツというメディアを使って、仲間やライバル、目標といったものを得ることだってできる。そして、我々はそれを知っている。

人間とコンピューター、どちらが支配するのか「勝負」するのではなく、感情ある人間が、感情なきコンピューターを利用し、使いこなすことができれば、コンピューターなどのメディアは感情を持つことができるのかもしれない。だって、幼いころは、人形と心を通わせ、喋っていたのだから。だったら最初から、人間とコンピューターとの間に「支配」という関係など存在しないのかもしれない。いや、きっとそうだ。だから、エフ博士の伝染病菌と、人間とコンピューターとの関係を壊す薬が開発されないことを願おう。

『エイジ』重松清 著

## 大人に近づく子供

- 『エイジ』を読んで -

1 M 松内 秀直

体育館倉庫の写真の真ん中にエイジと書かれた表紙を見て、なんだか格好良く思い、読んでみることにした。

物語はクラス委員の選挙の場面から始まる、語り手はすべて主人公である高橋栄司の主観で描かれ、そのとてもリアルな栄司の感情や心境に夢中になり、

完全に『エイジ』の世界に入り込んでしまった。

子どもだって人は人なのだ、その点では大人と変わりはないと思う。多くのことを感じ、そして悩む、それは僕自身この身をもって分かっている。友達のことや好きな子のことそして、家族のこと。いろいろなことを経験するこの時代は、なんと言うか、とても苦しい。それがあまりにひどいと、全てのつながりを切ってしまいたくなってしまふ。つまりキレルということだ。栄司も自分をとり巻く世界からキレようとする。そして、その栄司に僕はとても共感できた。

自分を重病人、自分のつながりを体につながれたチューブだという表現がとても分かりやすく、個人的に栄司が学校を飛び出し、自転車に乗った場面の「ペダルを強く踏み込んだ。プチプチプチプチッと、チューブがちぎれていく。ぼくはどんどん身軽になる。」という表現が好きだ。自転車の速度が上がっていくのを表現すると同時に、栄司の心の爽快感を表現している。栄司は自分とつながるものをどこまで切りたかったのだろうか。僕は栄司と自分を重ねて読んでいたが、そこだけははっきりと重ならず、栄司の心を読み取ることができなかった。どこまで大事なものと自分を切ってしまいたかったのだろうか。ここは人それぞれ個人差があるのだろうか。あって当然だと思っている。しかし、どこまで切ろうとしようがつながりというものは常識的に切れない、栄司はこのことに気づいたのだ。

切ろうとしても切れないことに人は切ろうとして気づく。この本を読んでこのことにとっても感動した。栄司もそうだったのだろう。学校を飛び出した後、遠くまで行ったが、結局おさまり、家に帰っている。それからまた、普通の生活に戻るのだろう。

切れたものは元にもどるだけでなく、また切れないようにより強くなるのだと思う。栄司はそのサイクルの中でまた一つ強くなった。これは栄司だけではないことは確かだ。栄司が強くなる事によって、周りの人々も強くなったように、栄司もまた周りの人々の影響によって強くなるのだと思う。

栄司はこれからもキレてしまうかもしれない、しかし、栄司にはその中でまた、自分を強くして乗り切り、いい大人になってもらいたい。

『なぜ分数の割り算はひっくり返すのか?』板橋悟 著

## 僕の数学への考え方

- 「なぜ分数の割り算はひっくり返すのか?」を読んで -

11 辻 悠一郎

数学 = 理系ではない。この本を読んで一番初めに感じたことだ。この奈良高専に入学して四ヶ月が過ぎたが、つくづく高専は理系だと思う。理系と文系では習う教科が違い、数学は間違いなく理系に含まれるだろう。しかし、文系に進んだものが全く数学を使わないことはありえない。生活の中で数学は生きている。これをわかりやすくこの本は伝えてくれた。

本文中にこのような言葉が出てくる。「因数分解で、痩せる！」なんのことがさっぱりわからなかったが、読んでいくうちに、何のために痩せたいのか、痩せたいなら痩せるために何をすべきか、など、痩せるという目的を要素に分解していき、痩せるためには自分が何をすればいいのかを明確にすることでダイエットが続くということだと分かる。テストの問題でしかなかった因数分解がこれで一つ、ダイエットというかたちで生活とつながった。

僕はあまり数学が得意でなく、なぜ数学を勉強しないといけないのかわからないままだった。普段は使わない記号や計算式。覚えても生活には関わりのない公式の数々。しかし、この本を読むと、数学が僕たちの生活や社会に大きく関わっているとわかる。このことがわかると、数学の問題を抽象的なものから、僕たちの生活と関係した現実的なものとして見ることができ、数学の問題に取り組みやすくなる。また、このような数学的思考は物事を順序立てて、論理的に考えることにもつながり、現代社会で必要とされているロジカルシンキングを手に入れることもできるのではないだろうか。

あらゆる作業が機械化され、コンピュータで制御されるようになった現代で、今、人々に求められているのは考える能力ではないだろうか。考える能力を身につけるためには、数学的思考を使う必要があると思う。ではどうすれば数学に興味を持つことができるのか。これもやはり数学を身近なものとして

つけて考えることが重要だろう。「数学は大人になって何の役にたつのか」「日常生活で数学がどんな風に使われているか」を自分の体験の中から見つけだし、考え、人に教えてもらう。こうすれば数学という教科にもっと興味が持てるのではないか。

僕はこの本を読んで、以前は数学のことを「ただ公式を覚えて計算する学問」として考えていたが、「日常生活の中で無意識のうちにやっている数学的な物の見方や頭の使い方だ」という考えに変わった。数学が嫌いだという人には是非読んでもらいたい。きっと、数学への価値観が変わると思う。

『風が強く吹いている』三浦しをん 著

## ハイジと走に学んだこと

- 『風が強く吹いている』を読んで -

1C 山本 峻也

「俺たちみんなで、頂点を目指そう。」

ハイジが言ったその一言で箱根駅伝に向けて走り出した竹青荘の十人。時に仲間とぶつかり合い、時に『走る』ということについて考え、仲間との絆も深めあって、無謀だと思われた箱根駅伝に出場する…。

僕はこの本を読んで、二つわかったことがある。『走る』ということについてと、仲間の大切さだ。『走る』ということについて、僕も以前、陸上の長距離をやっていたので、ハイジや走たちの気持ちがよくわかる。『走る』ことの基準を速さとして考えるなら、頂点をとれる人は一人しかいない。しかし一番になるならないを別にして、走り続ける人はたくさんいる。ハイジが走に「長距離選手に対する一番の褒め言葉は『速い』ではなく『強い』だ」という話だったが、それは、たとえ一流のランナーでも、市民ランナーでも、目標に向かって走り続けてきた努力は変わらない。自分と向き合いどれだけ走り続けてきたかが、タイムよりも栄光よりもすごいことなんだということを伝えたかったのだろうと思う。

仲間の大切さについては、この本のケンカのシーンでわかったことがある。どうしてもタイムが伸びない王子に対して、走が「もっと練習しろ！」とクレームをつけた時にハイジが走に対して怒ったシー

ンだ。この時ハイジは、

「いいかげんに目を覚ませ！ 王子が、みんなが、精一杯努力していることをなぜきみは認めようとしてない！ 彼らの真摯な走りをなぜ否定する！」

とっている。この言葉でハイジがいかに竹青荘のメンバーを信頼しているかがわかった。王子以外に変わりの選手がいないので、タイムが悪ければ文句を言いたくなる走の気持ちもわかる。しかし、そんな中でも全員が努力していることに気づき、そして相手を理解することができるハイジがとてもかっこよく思えた。僕もハイジみたいに仲間を信頼できる人になりたいと思う。このケンカの後、走は除々に仲間を信頼できるようになっていき、他校のメンバーに竹青荘のメンバーをバカにされたとき、そのランナーに走は反論している。

最後にこの本を読んで、高専での生活にたのみかけている僕にとって、これからの高専生活に役立てればと思う。『走る』ということのように、たくさん勉強やクラブ活動に対して自分と向き合い努力し、また、高専での五年間で、人を信頼することができるようになり、また、お互いが信頼しあえるような仲間を作っていけるように、夏休みあけから頑張っていきたい。

『物理屋になりたかったんだよ

ノーベル物理学賞への軌跡』小柴 昌俊 著

## 『物理屋になりたかったんだよ』

2M 鈴木 耕太

この本は、独自の観測機である「カミオカンデ」を使って世界で初めて超新星からのニュートリノ観測に成功し、ノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊さんが、自身の生い立ちからこれまでの研究人生について語ったものをまとめたものである。題名の『物理屋になりたかったんだよ』という言葉は、実はあの南部陽一郎さんから贈られた言葉だそう。

南部陽一郎さんは、自発的対称の破れの発見により、やはりノーベル物理学賞を受賞した理論物理学の先駆者で、小柴さんは若い頃に南部さんの研究室で「修行」をしたことがあったらしい。そのころ小柴

さんは、勉強で苦労していたそうだ。ずっと後になって小柴さんが文化勲章をもらったときに南部さんからファックスが届き、そこに「チンパンジーがひっくり返って、そばに本が開いてある図柄」とともに書かれていた言葉が『物理屋になりたかったんだよ』なのである。小柴さんは南部さんに認められた喜びを「いまでは南部さんも私のことを物理屋だと思ってくれるようだ」と語っている。

小柴さんと関わりの深かった研究者は南部さんだけではない。同じくノーベル物理学賞を受賞している朝永振一郎さんにもかわいがられ、アメリカに留学するときの推薦状を書いてもらった。また、その留学先のアメリカで出会ったジュゼッペ・オッキアリーニさんは「相手がどんなに偉い人であっても、必要な時には言うべきことを言うこと、また、実験が予定どおり進行しなかったときの対策をいつも考えておくこと」など、実験を計画する時の基本方針となる考え方を教えてくれた。物理をやる上で父親のような存在であり、小柴さんを国際研究のリーダーに推してくれた。さらにニュートリノの研究ではカミオカンデとライバル関係にあったアメリカにおけるニュートリノの共同研究IMBの幹部のフレッド・ライネスさんは、超新星ニュートリノの観測時刻を争った際に、わざわざ電話をかけてきて、いち早く小柴さんの観測成果を認めた。これにはもちろん、小柴さんが言うように、フレッド・ライネスさん自身の「懐の深さ」もあるが、小柴さんの人柄も大きく影響していると思われる。この他にも、小柴さんの周りには、後に後継者となる若手研究者も含めて、いつも様々な人々が集まってきた。

これについて小柴さん自身は「私は運の良い男で、人生の要所要所で力になってくれる人に巡り会ってきた。」と言っている。しかし、それは果たして本当に運だけなのだろうか。僕はそうではないと思う。

小柴さんは、様々な人たちと出会い、助けられ、協力し、常に人とのつながりの中で、自分の研究を次々と成功させていった。これは、決して運だけではなく、小柴さん自身の人とつながる力によるものだろう。

しかし、小柴さんはいつも人に合わせて争いを避けてきたわけではない。アメリカで前述のオッキアリーニさんから「喧嘩の仕方」を学んだ彼はニュートリノ観測で、「自分たちの方が先に見つけた」と勝手な主

張をしてきた相手に対して、「そんなバカげたことを言うな」と怒鳴りつけたこともあった。

ぼくは、研究者には人付き合いの能力も必要であることを知った。ぼくも、周りの人たちとの関係を大事にしつつ、必要な時には言うべきことをいえる人間でありたいと思う。

『EXILE 夢の向こうの志』稲富治男 著

## 本物のエンタテインメント

2C 小柳 伊代

この本は、日本のトップアーティストグループであるEXILEの、彼らの心の底にある活動への想いについて書かれたものです。私はこの本を通して、本物のエンタテインメントとはどのようなものかを考えました。

エンタテインメントは、単なる「娯楽」と受けとめられることが多いですが、本来、それ以上に深い意味があります。エンタテインメントのもとの動詞「entertain」には、「人をもてなす」「楽しませる」という意味があり、それこそがエンタテインメントの本質です。EXILEのエンタテインメントは「生きる喜びの表現」であり、さらに「人を楽しませるために自分を楽しむ」という考え方があります。人を楽しませるために、自分が心から楽しむことで、自分も自然に輝くことができます。そして、見ていただく人に喜んでもらい、元気になったり、幸せになったり、夢を抱いたり、何より生きる力を持ってもらうことができます。それが、エンタテインメントの持つ素晴らしい力であり、エンタテインメントをする最大の目的であり、喜びであると思います。また、EXILEには、「Love, Dream, Happiness」という活動のテーマがあります。人それぞれ、この言葉の受け止め方は違うのかもしれませんが、しかし、すべての人々に共通する大切な想いでもあります。この言葉は、世代を超えて感じ合い、響き合い、そして絆をつくるものだと思います。「Love, Dream, Happiness」、それは人間にとって必要不可欠な生きる力のみなもとです。

私は、吹奏楽で楽器をやっています。今まで、吹

奏楽はエンタテインメント、自分はエンタテインメントをやっている、などと考えたことはあまりありませんでした。しかし、「人を楽しませるために、自分を楽しむ」という言葉を読んで、吹奏楽も立派なエンタテインメントの一つだなと思いました。そして、自らがそのエンタイナーにあたることには驚きました。私は、EXILEのように世界中のたくさんの人々に元気を与えたりすることはできませんが、いつもお世話になっている方々、昔お世話になった方々、偶然出会った方々など、身近な人々に楽しんでもらえるような演奏がしたいです。そして、生きる力については大げさかもしれませんが、少しでも、元気になってもらったり、幸せになってもらったり、笑顔になったりしてもらえると、とても嬉しいです。

「人のため」「自分のため」が見事に両立し、分かち合うことが基本になっているこの「エンタテインメント発想」は、人生や仕事、人間関係においても、とても役に立つように思われます。今の日本では、多くの国民が不安を抱えて生きています。自殺者の増加、不況の影響による就職難など、国民が決して幸せを感じて生きているわけではなく、夢も希望もない世の中になってしまいかねません。新しい日本へと歩みださなければならない今、一人ひとりが日本人としての誇りを持ち、確かな絆となり、日本の底力を発揮することが重要となるでしょう。本物のエンタテインメントは、日本を元気にするきっかけになると思います。生きる力を与えてくれるエンタテインメントは、これからの世の中に必要なものであり、重要な役割を果たすものであると思います。

『罪と罰』

フォードル・ドストエフスキー 著 / 工藤精一郎 訳

## 正義の味方と殺人犯

- 『罪と罰』を読んで -

2C 隅谷 大良

「人を殺してはいけない」とはみんなが信じていることですが、「正義のための人殺し」だとしたらどうでしょうか。実際、「正義のため」となると、

どんなことでも許されるような気がしてしまうのではないのでしょうか。

この、『罪と罰』という本はその反対に、悪人を殺した人が自首する話です。扱っている事柄の重さにしては、物語の内容は暗くなく、登場人物や台詞も多くて読み易いとさえ感じました。とはいえ、読み終わった後とても考えさせられたのも事実です。

主人公のラスコーリニコフは、どうして多くの血を流したはずのナポレオンが人々から称賛されるのかを深く考え、ナポレオンは殺人に伴って何百もの善行をしたのだと結論を下します。次に彼は、ならば自分も同じような事をしたとしても正しいと考え、町で貧乏人から金を吸い取っている高利貸しを殺害して、その金を善行に使おうと企てます。そして実際に殺します。これを読んで私は、彼は何か間違っていると思いました。それでも冷静に考えてみると、彼がした事は、映画などでよく正義の味方がするのとまったく同じ事だとも思いました。悪人を倒したのです。しかし私は喜ばませんでした。

この本を最後まで読んで、ラスコーリニコフは何が間違っていたのかを考えてみると、二つ気がきました。第一に、善を行うためであれ、する権利の無い事を行ったということです。自分の持っている権利を超えてまで人助けをすることはできないと思います。医師でない人は、どれだけ善意があっても、医療処置をすることができないようにです。彼は物事をどれだけ理解していたのでしょうか。しかし彼はまるですべてを知っているかのような様子でした。ナポレオンやその他、血を流しながらも目的を達成しようとした偉人とよばれる人たちが、結局善を行った、と考えたのは彼でした。高利貸しが社会の害となっているので、殺す以外に道はない、と考えたのも彼でした。そして、それを自分ができると考えたのも彼でした。第二に、悪人以外の人も傷付けたということです。罪のない人を傷つける正義のための行動というものは、正義ではないと思います。彼は、現

場に偶然居合わせた、高利貸しの妹も思わず殺してしまいました。また、彼が殺人を犯したということを知って、彼の家族や友人は、深く傷つきました。

ここまで考えてみると、やはり先の、「映画の正義の味方」とラスコーリニコフの差は何なのだろうか、という問題を考えてしまいます。そして、その差はそれほど無いのではないかと私は思います。確かに、「映画の正義の味方」は悪人だけをうまく殺せるかもしれませんが、それにしても、その悪人が死ぬとすべてが良い方向に行く、とどうして言えるのでしょうか。また、誰に権利を与えられて、そうしたことをするのでしょうか。もちろん、映画などの悪人はたいてい、死ななければならないほど悪いものに創り上げられています。しかし、現実の世界では、そのような復讐が完全に公正なものとなるこ

とはまずありません。誰かが見過ごされたり、何かが出来たりするのは。だからこそ、ラスコーリニコフは自首を選んだのです。そのような、人のする復讐の現実が、『罪と罰』には描かれていると私は感じました。こうしたことこそ、「人を殺してはいけない」以上に覚えておくべきではないでしょうか。殺したくなることはなくても、自分で復讐したくなることはあるでしょうから。

## 図書館の利用にあたっての注意

### 図書館の本は大切に扱きましょう

時々、付箋が付いたままだったり、中に書き込みがしてあったりする専門書が返却されます。誰か他の人が貸してくれた本に、付箋を付けたまま返しますか？中に書き込みをしますか？図書館の本は、あくまで借り物です。皆の本です。そのことを分かったうえで利用してください。

### 図書館では静かにしましょう

小声で勉強を教え合うのは構いませんが、時々大きな私語や笑い声が聞こえます。しばらく続くようであれば、注意しに行きます。息抜きでちょっとお喋りしたい気持ちは分かります。でも、静かな館内に、貴方たちだけの声が響き渡っていませんか？貴方が一人で勉強している時、うるさくしている人たちに苛々したことはありませんか？一人一人が気を付けましょう。

### 返却期限を守ってください

期限内に読み切れなかった本（雑誌）は、他の人に予約されていなければ返却期限を延長することができます。手続きをせず、そのままズルズルと借り続けることはやめましょう。図書の延滞があると、新たな貸し出しはできません。



# 本を読みましょ！ ～図書館から～

皆さんは図書館をどれくらい利用していますか。毎日来る人、試験前にだけ来る人、もしかしたらほとんど行ったことがない人もいるかもしれません。利用方法としても、読書・勉強・レポート作成等、色々あるでしょう。ここでは、読書について少し書いてみたいと思います。

どんどん本を読みましょ。私は子どもの頃から読書が好きで、ひたすら本ばかり読んでいました。今はとりあえず毎月10冊を目標にしていますが、諸々の理由であまり読めず、年間100冊読めたらいいかなあというところですよ。今は本を購入することの方が多のですが、学生時代は、学校と地域の図書館をよく利用していました。大学の図書館には専門書しかなくて、ショックを受けたことを覚えています(笑)。今から思い返してみれば、自分の好きな読書傾向が確立された頃で、ワクワクしながら手当たり次第に読んでいました。

本は心を豊かにしてくれる、教養を深められる等と大層なことを言うつもりはありません。純粋に、楽しい・面白いことだと思います。思わず頭の中で絶叫した本、号泣した本、心が温かくなった本、面白過ぎて止められなくて夜中の3時まで一心不乱に読み続けた本 色々あります。もちろん、そのようなものばかりではなく、読むことがまるで苦行としか思えないものもあるでしょう。しかし、そのような本を読むこともきっと何らかのプラスになると思います(多分.....笑)。

本なんてほとんど読まないという人もいます。個人的には、ちょっともったいないかなと感じます。映画やドラマの原作本、ライトノベル、好きな芸能人が勧めていた本、話題の本.....何でもいいと思います。少しずつでも読んでみてはいかがでしょうか。他のこととはまた違った、読書だけが持つ楽しさというものを感じられるのでは.....。また、本を読むことについて妙に構えずとも、読書はいわば究極の暇つぶしですよ。もっと気軽に、本に触れてほ

しいと思います。ゲームやネットの方がよっぽど暇つぶしできるという意見もあるでしょうが.....(笑)。

そして、本をよく借りて読む人。カウンターで処理をしていると、借りられていくのはやはり日本の人気作家の本が多いように感じます。是非、海外の作家の本も読んでみましょ。登場人物の名前が覚えられない、翻訳文体が読みにくいetc...の理由から敬遠されがちなのか、ただ単に海外の作品自体に馴染みがないのか.....よく分かりませんが、読書は好きだけれど日本の作家しか読まないという人がもしあれば、それは絶対に損ですよ！ただ、元々本校の図書館には海外作品の蔵書が少ないので、これから増やしていきたいところです。

長々と書きましたが、私自身はいわゆるブンガク作品はあまり読んでいませんし、少々偏った読書しかしていません。また、これは小説を想定して書いており、そもそも娯楽としての小説より高専生としては専門書を読むべきという意見もあるかもしれません。ただ、読書は楽しいよーもっと本を読もうよーということを学生の皆さんに言いたかったので、書かせていただきました。是非、もっと本を読みましょ！



# 電子ジャーナルを使ってみよう

情報メディア教育センター副センター長（図書担当） 名倉 誠

本校図書館のパソコンからは、科学総合誌 Scienceをはじめ、ScienceDirect、SpringerLink、JDreamIIのほかアメリカ物理学会 (APS)、化学会 (ACS)、数学会 (AMS) が発行する電子ジャーナルを読むことができます。例えば Science は有名なジャーナルですが、本校では 1997 年以降誌に掲載された論文のフルテキストが閲覧できます。皆さんも新聞などで「[世界で初めて成功し、米科学誌サイエンスに発表した](#)」のような記事を見かけたことがあると思います。そのサイエンスこそがこのジャーナルです。

では試しに、奈良高専図書館のホームページ左側の「電子ジャーナル」のバナーから辿って、Scienceへアクセス<sup>(1)</sup>してみましょ！ トップページの画面右側には「Science」最新号の目次の抜粋が表示されます。目次には「60ドルで飼い犬の心を垣間見る」とか「水星探査機メッセンジャー搭載中性子分光測量計により水星北極付近に氷が存在する証拠を発見した」など興味をひくタイトルが並んでいますね。もちろん過去の記事を検索することもできるので、ぜひ皆さんも一度、使ってみてください。英語の勉強にもなるはずですよ。

また本校では、アメリカ数学会の MathSciNet も利用できます。これは数理科学分野のほぼすべての研究論文の書評（レビュー）をまとめた雑誌 Mathematical Reviews の WEB 版です。ところで、この MathSciNet では「エルデシュ数」というのが計算できる<sup>(2)</sup>のです。エルデシュ数というのは、20 世

紀の著名な数学者エルデシュ<sup>(3)</sup>との“距離”を、共著論文をたどって測ったものです。すなわち、エルデシュ自身のエルデシュ数は 0 で、エルデシュ数  $n$  を持つ者と共著論文を書いた人にはエルデシュ数  $n+1$  が付与される、というものです。また、任意の 2 名の研究者の距離を、同様に測ることもできます。こういう遊び心もあるのが、面白いと思いませんか？

勉強にも「遊び心」が大切ですよ。ぜひ皆さんも勉強の息抜きに、いずれは卒業研究で、ぜひ電子ジャーナルを利用してください。

<sup>(1)</sup> 具体的には、図書館ホームページ左側の [電子ジャーナル] のバナーをクリックすると、本校が購読している電子ジャーナルの一覧が表示されます。この画面で「Science (英語版)」を選べば英語のページが表示されます。(なお英語が苦手な人は、この英語のページ右下の「Science 日本語版 HP」をクリックすれば、日本語が表示されます。)

<sup>(2)</sup> MathSciNet トップページ上部の [Free Tools] [共同研究間隔] と辿り、研究者名を入れる。

<sup>(3)</sup> 数学者エルデシュについては、ポール・ホフマン著「放浪の天才数学者エルデシュ」を読んでみてください。この本はもちろん本校図書館にあります。



## 研究紀要を電子化します

今年度から、「奈良工業高等専門学校研究紀要」が電子化されます。これまでは冊子に印刷していましたが、今年度以降は、冊子に代わって、論文の PDF ファイルが図書館ホームページで公開されます。過去の論文も順次図書館ホームページにアップロードされる予定です。

## 奈良高専図書館アーカイブ

9月30日に本校で開催された「青少年のための科学の祭典」奈良大会に併せて、図書館棟 2 階の大視聴覚室では「第 1 回奈良高専メディアコンペティション」が開催されました。これは学生チャレンジプロジェクトをはじめ各種コンテストへの取り組みを、各チームがポスターにまとめ、紹介するものです。作成されたポスターは、「奈良高専図書館アーカイブ」として、図書館ホームページに蓄積していく予定です。今の皆さんの取り組みが、今後の多くの後輩たちに良い刺激を与え、彼らを奮起させることを願っています。

# 学生図書委員会 活動報告ほか

## 一年間の活動を振り返って

4M 井上 遙介

図書委員 4 年目もほぼ終わった委員長の 4M の井上です。正直な話、ろくに委員会を纏めることもできなかった自分が活動報告なんて書いてもいいのかなぁなんて思っていたり。出来れば去年数学の教科書で感想文を書いた優秀な彼や同じく優秀な副委員長にでも頼んでほしかったところですがそういう訳にもいかないようです。活動報告ですし。委員長の仕事ですし。

さて、本題の活動報告に入ります。今年度はブックハンティングを中心に、女子向け雑誌の導入、寄贈図書の貸し出し開始、図書委員会だよりの発行という新しい試みも開始しました。また、恒例となっている読書週間に合わせた企画展示も行いました。例年よりも忙しくも充実していたように思います。各企画のグループリーダーも真面目に取り組んでくれて助かりました。

ブックハンティングは例年通り 6 月と 11 月に大阪のジュンク堂書店で行い、各クラスの希望図書を一通り購入してきました。しかし毎回購入希望額がウン万円にもなるクラスと 0 円になるクラスに二分されてしまい…。そこで昨年度より予算の振り分けを行い、購入希望図書が多かったクラスが多めに本を買えるようにしています。購入希望額が 0 円のクラスにも予算は残しており、当日良さそうだった本を購入してもらいました。

雑誌導入はなんというか、高専というか…。某アニメ雑誌を購入選択肢に入れた時点でこうなるのは予想の範疇ではありましたが。購入したアニメ誌も女性向けファッション誌も好評だったので良かったです。

読書週間は皆既日食など天体現象に触れる機会の多かった年だったので、テーマを「天体」とし、例年通りクイズを作ったりレビューを書いたのを飾ったりしました。

寄贈図書貸し出しは結局 12 月まで割り込んでしまいました。何とか開始にこぎ着けることができました。来年度もたくさんの図書の寄贈、お待ちしております。

図書委員会だよりは合計 4 回発行しました。実は全て 2 年の委員がデザインしてくれています。多分読んでくれている人は少ないと思いますが…。今度機会があったらぜひクラスの掲示板に張ってある委員会だよりを読んでみてください。委員のレビューや委員会・図書館からのお知らせなどが書いてあります。意外と面白いですよ？

最後に。本年度はグループリーダーを中心に委員全員、特に低学年の委員が非常にマメに仕事をこなしてくれたおかげで全企画を成功裏に終わらせることができました。この場を借りてお礼申し上げます。そして学生の皆さん、来年度も図書委員会をよろしくお願いします。

### 寄贈図書コーナー



今年度の図書委員会の活動の一つとして、寄贈図書コーナーを設置しました！ ここには図書館に寄贈された図書が並んでいて、これらの本は借りることもできます。詳細は備え付けのノートを見てください。

# 人間失格 太宰治

1M 萩岡 宣旭

この本を読んでいると、様々な人間の罪、蜜、汚れ、墮落、嫌悪、情をすべて鍋で煮込んだおどろおどろしいもの、そんなものを飲まされた気分になりました。

この話は作者の経験談から作られた物語です。心中、左翼、飲酒、薬物、咯血まるで作者の経歴をなぞっているかのように。

だからこそ、前述の通り、悲しい、とも、嘆き、とも、恐怖、とも違う、言葉にしにくい、唯一その感情については気持ちのよいものではない、としか形容できない生まれて初めての心の揺らぎを感じとれたのだと思います。

『いまは自分には幸福も不幸もありません。ただ、一さいは過ぎて行きます。』

ただ、過ぎていく時間の中でどのような思いを作るのかは自分次第です。

# 魔女の宅急便 角野栄子

1E 富田 明日香

私は魔女の宅急便という本を読みました。皆さんも映画が何かでご存知だとおもいますが、この本ではあの映画の時とは違う魔女の宅急便がみれます。私も、最初のほうは同じかなと思って読んでいたんですが、読み進めるにつれて映画とは違う話になっていきました。この本では映画で最後にでてきたあの飛行船はでてきません。キキが宅急便屋さんをするのは同じなんですが、その依頼人を助けたりもします。この物語のいいところは魔法使いが使う魔法がとても単純であることや、キキがどれだけ成長したかとか、新しい街に着きたての頃と1年間住んでからその新しい街に対してどう思ってるかなどというキキの内面の变化も表されています。とても面白い本でした。

# ショートショートの中の神様

2I 酒井 峻

「ショートショートの中の神様」と言われた作家を知っているだろうか。その名も「星新一」である。

ショートショートとは、短編小説よりさらに短い作品のことで、わずか数ページで作品が終わる。そのショートショートを一気に広めたのは、今回紹介する星氏である。

星氏は、1001編以上のショートショートを書き、「ショートショートの中の神様」と呼ばれた。どれも短い作品ではあるが、ブラックユーモアや風刺、皮肉が効いた作品が多く、考えさせられることも多い。そんな星氏の作品をいくつか紹介したい。

まずは、「生活維持省」である。一時期、イキガミが似ていると話題になった作品である。そこは、平和な世界。しかし、それは人口抑制によって行われているもので、誰かが犠牲にならなければならない。生活維持省の役人がランダムに選ばれた人を、この日も一人を殺したが、次は役人自身が選ばれた。役人は、一緒に回っていた相棒の役人に最後にこう言った。「ああ、生存競争と戦争の恐怖のない時代に、これだけ生きることができて楽しかったな」

また、「おーい でてこい」もおすすめである。台風によって飛ばされた社の跡から穴が出てきた。「おーい でてこい」と呼びかけても反響してこない。調査の結果かなり深い穴だと分かり、放射性廃棄物などの処分に関わる物を捨てていった。ある日、ビルを建設している工員が休んでいると声が聞こえた。「おーい でてこい」

他にも、沢山の作品があるが、どれも考えさせられるオチで、面白い作品ばかりである。わずか数分で一作品を読み終わられるので、ぜひとも読んでその皮肉の効いた面白さを感じて欲しいと思う。

# Information



## 読書週間

今年も学生図書委員会の活動として、読書週間の展示を行いました。今年のテーマは「天体に関する本」。およそ35冊の図書を並べ、飾りつけを行いました。天体総合カタログや天体写真集など、興味ある本がたくさん揃っています。



## ブックハンティング11月

恒例のブックハンティング（今年度2回目）を11月17日（土）13：00から2時間ほど、大阪堂島のジュンク堂書店大阪本店で行いました。

本科学生30名のほか専攻科生2名、教職員14名が参加し、255冊の図書を購入しました。



## 「図書館委員会だより」

今年の学生図書委員会の活動として、「壁新聞」=図書委員会だよりを4回発行しました。学生図書委員のおすすめ本や図書委員会からのお知らせを掲載し、各教室や学生玄関などに掲示しています。

## 「図書館だより」は 今回で70号を迎えました！

「図書館だより」が発行されたのは昭和54年。以来、およそ1年に2回（平成17年からは1年に1回）のペースで発行され続けています。過去の全文は図書館のホームページで読むことができますので、先輩たちの足跡を訪ねてみては.....？

## 編集後記

図書館だより記念すべき第70号も無事発行でき、ご寄稿くださった皆様に感謝いたします。

図書館は「明るく」リニューアルする予定ですので楽しみに。平日夜間も土曜も、どなたでもご利用いただけますので、たくさんの方々のお越しをお待ちしております。

(図書館)



奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町 22  
TEL 0743-55-6015  
URL <http://www.nara-k.ac.jp/library/>

**リサイクル適性**   
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。